

1 音楽科における教育課程実施上の課題と指導上の留意事項

(1) 学習指導

- ① 学習指導要領の基本的な特徴
 - ・ 指導のねらいや手だてを明確にし、子どもが感性を高め、思考・判断し、表現する一連の過程を重視する。
- ② 指導内容
 - ・ 全ての子どもが学習する内容を確実に押さえた学習指導を行うことが重要である。
- ③ 音楽的な感受
 - ・ 感性を働かせて感じ取ったことを大事にしながら、思考・判断・表現する。
- ④ 音楽づくりと鑑賞の学習指導の工夫
 - ・ 子どもが音楽の良さや面白さなどを感じ取りながら、思いや意図を持って表現したり味わって聴いたりする力の育成を重視する。

《音楽づくり》

- ・ 子どもの自由な発想を引き出し高めるような学習活動を工夫することが大切である。
- ・ 音楽をつくるということは、旋律をつくことだけではない。提示した形や線を自分の声や楽器の音色で表したり、一つの音素材から多様な音を見付け出したり、打楽器を用いて「音の会話」をしたりする活動は、その一例である。
- ・ これまで擬音や効果音に偏っていたという課題が指摘されていたが、そのような授業がなくなってきた。さらに、子どもがつくった作品は、音楽的なまとまりと、表現の工夫の豊かさを感じるものが多くなった。反復、問いと答えなどの〔共通事項〕に記された「音楽の仕組み」を生かして音楽をつくるという指導のポイントが浸透してきている。

《鑑賞》

- ・ 音楽を全体にわたって味わって聴くことが大切である。全体の流れで特徴的なところを聴き取ることを大事にする。
 - ・ 子どもが感じ取ったことを言葉で表すことによって、鑑賞の学習を深めるようになってきている。このような授業では、単に感じ取ったことを言語化するだけでなく、音楽を形づくっている要素の働きと関連付けて言葉で表すことにより、音楽の特徴を深めている授業が多い。
- ⑤ 言語活動、体を動かす活動等を取り入れた指導
 - ・ 音楽の表現と鑑賞の学習を充実させるために、言語活動、体を動かす活動等を取り入れる。また、学習内容への関心と意欲を高めるポイントとして、教材曲に即して、感じ取ったことを体の動きで表したり、絵や図で表すなどの手だてを工夫し、学習活動を構成する。しかし、最も大切にされるのは、音楽活動そのものであり、言葉で表したり、体の動きで表す活動等が、学習の目的とならないように十分配慮すること。
 - ・ 言語活動においては、〔共通事項〕に係る言葉を活用したり、共有したりすることが大事である。

(2) 学習評価

- ① 各観点の趣旨の理解と評価規準の設定
 - ・ 「音楽表現の創意工夫」は、子どもが何を考えて、どうしようとしたのかという思いや意図を見取る。「鑑賞の能力」は、味わって聴いていることを見取る。友だちに伝えていることは鑑賞の能力ではない。
- ② 各観点の関連と適切な評価の位置付け
 - ・ 例えば、「A表現」領域では、〔共通事項〕の学習を支えとして、音楽表現を工夫し、思いや意図を持つ力と音楽表現の基礎的な技能を身に付け歌ったり、楽器を演奏したり、音楽をつくったりする力を相互に関わらせながら育み、それぞれの学習状況を見取る。
- ③ 評価場面等の精選
 - ・ 子どもの状況を常に把握して工夫のある指導を十分に行う中で、評価を行う場面等を精選することが重要である。

(3) 指導計画

- ① 各領域・分野の関連を図った題材構成
 - ・ 各領域・分野の関連という点から、以下の三つのタイプの題材構成の方法がある。
 - A 特定の領域・分野で構成（例：歌唱のみ、鑑賞のみ）
 - B 表現領域における複数の分野を関連付けて構成（例：器楽と音楽づくり）
 - C 表現領域と鑑賞領域を関連付けて構成（例：音楽づくりと鑑賞）
 - ・ Aのタイプの構成が効果的な場合もあるが、各領域・分野の学習は、BやCのように相互に関連させることで効果を上げる場合も多い。改訂のポイントの一つでもある鑑賞の質的な充実を図るためにも、表現の各活動と鑑賞の活動を適切に関連付け、双方の学習を充実させていくCタイプのような題材構成を工夫することが重要である。
 - ・ 「A表現」及び「B鑑賞」領域とも、その学習の支えとなるのは、音楽的な感受に相当する〔共通事項〕事項アの学習である。表現と鑑賞の関連を図る際のポイントである。
- ② 目標、指導内容、教材、評価規準、学習活動等の整合性
 - ・ 一貫性・整合性に課題があるケースに共通するのは、題材を貫いて大切に指導する要素が明確でないことである。そのため、複数の活動や教材が、指導内容の点から関連付けられていなかったり、第一次から第二次、第二次から第三次への学習展開において、一貫性や発展性が希薄だったりするケースも見られる。
- ③ 年間指導計画における題材同士の発展性、系統性
 - ・ 一学期、二学期の横のつながり、あるいは、低・中・高学年の縦のつながり、さらには、六年間を見通してどのような年間指導計画を立てるのか、題材同士の発展性や系統性を考えることが大切である。

2 自ら学ぶ子どもを育てる授業づくりのポイント

(1) 教材研究と学習活動の工夫

- ・ 教師は、教材曲の音楽的な良さや面白さがどこにあるのか、それらはどのような要素の働きによって生み出されているのかを把握しておく必要がある。そして、それらは、どの子どもにも獲得させたい表現や鑑賞のポイントになる。さらに教師は、どのような手だてを講じれば、子どもが自らそのポイントに気付いていけるのかを考える必要がある。当然であるが、教師の教材研究と学習活動の工夫が不可欠となる。

(2) 言葉の効果的な活用

- ・ 子どもが、①音楽の良さや面白さを自ら見付けていく、②個々の思いや意図を交流しながら音楽表現を高めていく、③楽曲の特徴や演奏のよさについての考えを深めていくといった主体的・創造的な学習を充実させる有効な手段が言葉である。音色、旋律、リズム、速度、強弱、音の重なり、繰り返しなど〔共通事項〕の内容に係る言葉は、そのために重要な役割を果たすものである。

(3) 自ら学ぶための技能を育む

- ・ 子どもが自ら学ぶためには、歌唱や器楽において範唱や範奏を聴いたり楽譜を見たりして、自らの力で楽曲の特徴を捉えて歌ったり演奏したりする学び方を徐々に身に付けていくことが大切である。例えば、リコーダーの新曲を学ぶ場合、楽曲の構造を楽譜に書き込む→特徴的な旋律やリズムや音楽に関する記号などを確認する→楽譜の旋律を見ながらドレミで歌う→ドレミで歌いながら運指を確認する→実際に演奏する→技術的に難しいところを取り出して練習するといった学習の過程を大切にすることによって、子どもは学び方が分かり、自分の力で楽譜を見て歌ったり演奏したりする技能を身に付けていくのである。

(4) 向上的な変容を意識する

- ・ 子どもは自分の変容を実感できたときに、音楽表現や鑑賞の活動への意欲を高める。例えばみんなで音楽表現を高めることができた、感じ取ったことを交流することで聴く喜びが深まったという実感である。向上的な変容を自覚できるようにすることが、次の学習活動への意欲を高めることにつながっていく。そのためには、教師が個々の子どもの意欲の高まりをつぶさに見取るとともに、一層意欲を高めることができる言葉掛けを行うなど、的確な指導を講じることがきわめて重要である。「参考資料：初等教育資料4・6月号」